伊勢の巻

泉鏡花作

昔男と聞く時は、今も床しき道中姿。其の物語に題は通へど、これは東の錢なしが、一年思ひたつよしゝて、參宮を志し、霞とともに立出でゝ、いそぢあまりを三河國、其のから衣、さゝおりの、安辨當の鰯の名に、紫はありながら、杜若には似もつかぬ、三等の赤切符。さればお紺の婀娜も見ず、彌次郎兵衛が酒落もなき、初詣の思ひ出草。宿屋の硯を假寐の床に、路の記の端に書き入わて、一寸御見に入れたりしを、正綴にした今度の新版、さあ／＼かはりました雙六と、だませぱ小兒衆も合點せず。伊勢は七度よいところ、いざ御案内者で客を招けば、おらあ熊野へも三度目ぢやと、いわてお供に早がはり、いそがしかりける世渡りなり。

明治三十八乙巳年十月吉日

鏡

花

＊
＊
＊
＊
＊
＊
＊
＊
＊
＊

一

「はい、貴客もしお熱いのを、お一つ召上りませぬか、何ぞお食りなさねて下さりまし。」

伊勢國古市から内宮へ、爰ぞ相の山の此方に、灯の淋しい茶店。名物赤福餅の旗、如月のはじめ三日の夜嵐に、はた／＼と軒を揺りじり／＼と油が減つて、早や十二時に垂とするのに、客は未だ歸りさうにもしないから、其の年紀頃といひ、容子といひ、今時の品の可い學生風、然も口數を利かぬ青年なり、迚も話對手にはなるまい、また為ないであらうと、斷念めて居た婆々が、堪り兼ねて先づ物優しく言葉をかけた。

宵から、灯も人聲も、往來の脚も、此の前あたりが丁ど切目で、後へ一町、前へ三町、其處にも彼處にも兩側の商家軒を竝べ、半襟と前垂の美しい、姐さんが袂を連ねて、式の如く、お茶あがりまし、お休みなさりまし、お飯上りまし、お饂飩もござりますと、媚めかしく呼ぶ中を、頬冠やら、高帽やら、菅笠を被つたのもあり、脚絆がけに借下駄で、革鞄を提げたものもあり、五人づれやら、手を曳いたの、

一人で大手を振るもあり、笑ひ興ずるぞめきに交つて、トンカチリと揚弓聞え、諸白を爛する家毎の煙、兩側の廂を籠めて、處柄とて春霞、神風に靉靆く風情、灯の影も深く、淺く、奥に、表に、千鳥がけに、ちら／＼ちら／＼、吸殻も三ツ四ツ、地に溢れて眞赤な夜道を、人脚繁き賑かさ。

花の中なる枯木と觀じて、獨り寂莫として茶を煮る媼、特に此の店に立寄る者は、伊勢平氏の後胤か、北畠殿の落武者か、お杉お玉の親類の筈を、思ひもかけぬ上客一人、引手夥多の彼處を抜けて、目の寄る前途へ行き抜けもせず、立寄つてくれたので、國主に見出されたはど、はじめ大喜びであつたのが、灯が消え、犬が吠え、恁う又寒い風を、欠伸で吸ふやうになつても、未だ出掛けさうな様子も見えぬので。

「如何でございます、お酌をいたしませうか。」

「否、構はんでも可い、大層お邪魔をするね。」

ともの優しい、客は年の頃二十八九、眉目秀麗、瀟酒な風采、鼠の背廣に、同一色の濃い外套を犇と絡うて、茶の中折を眞深う、顔を粛ましげに、脱がずに居た。もし此の冠物が黒かつたら、餘り頬が

白くつて、病人らしく見えたであらう。
こつくりした色に配してさへ、寒さの所為か、屈託でもあるか、顔の色が好くないのである。銚子は二本ばかり、早くから竝んで居るのに。
赤福の餅の盆、煮染の皿も差置いたが、猪口も數を累ねず、食べるものも、彼の神路山の杉箸を割つたばかり。
客は丁字形に二つ竝べた、奥の方の縁臺に腰をかけて、掌で項を壓へて、俯向いたり、腕を拱いて考へたり、足を投げて横ざまに長くなつたり、小さな然も古びた茶店の、薄暗い隅なる方に、其の擧動も朦朧として、身動をするのが、餘所目には宛然寐返をするやうであつた。
又寐られてならうか！
「あれ、お客様まだ此方のお銚子も全然お手が着きませぬ。」と婆々は片づけにかゝる氣で、前の銚子を傍へ除けようとして心付く、未だずツしりと手に應へて重い。
「お燗を直しませうでございますか。」
顔を覗き込むが如くに土間に立つた、物腰のしとやかな、婆々は、客の胸のあたりへ其の白髪頭を差

出したので、面を背けるやうにして、客は外の方を視めると、店頭の釜に突込んで諸白の燗をする、大きな白　丁の、中が少くなつたが斜めに浮いて見える上なる天　井から、むツくりと垂れて、一つ、くるりと巻いたのは、蛸の脚、夜の色　濃かに、寒さに凍てたか、いぼが蒼い。

二

涼しい瞳を動かしたが、中折の帽の庇の下から透して見た趣で、

「彼を些とばかりくれないか。」と言つて又面を背けた。

深切な婆々は、膝のあたりに手を組んで、客の前に屈めて居た腰を伸して、指された章魚を見上げ、

「旦那様、召上りますのでござりますか。」

「あゝ、而して、最う酒は澤山だから、お飯にしよう。」

「はい／／、……」

身を起して背向になつたが、庖丁を取出すでもなく、縁臺の彼方の三疊ばかりの住居へ戻つて、薄い座蒲團の傍に、散ばつたやうに差置いた、煙草の箱と長煙管。

片手で一寸衣紋を直して、扨て立ちながら一服吸ひつけ、

「旦那え。」

「何だ。」

「最う、お無駄でござりまするからお止しなさりまし、第一彼は餘り新しうないのでござります。其にお見受け申しました處、然うやつて御酒もお食りなさりませず、滅多に箸をお着けなさりません。何ぞ御都合がおありなさりまして、私どもにお休み遊ばします。時刻が經ちまするので、唯居てはと思召して、婆々に御馳走にあなた様、いろ／＼なものをお取り下さりますやうに存じます、ほゝゝほゝ。」

笑とともに煙を吹き、

「否、お一人のお客様には難有過ぎましたほど儲かりましてございまする。大抵のお宿錢ぐらゐ頂戴をいたします勘定でござりますから、私どもに最う一室、別座敷でもござりますなや、お宿を差上げたい位に、はい、もし、存じまするが、旦那様。」

婆々は框に腰を下して、前垂に煙草の箱、煙管を長く膝にしながら、今恁う謂はれて、急に思ひ出したやうに、箸の尖を動かして、赤福の赤きを顧みず、煮染の皿の黒い蒲鉾を挾んだ、客と差向ひに、背屈みして、

「旦那様、決してあなた、勿體ない、お急立て申しますわけではないのでござりますが、もし、お宿

はお極り遊ばして在らつしやいますかい。」
客はものいはず。
「一旦何處ぞにお宿をお取りの上に、お遊びにお出掛けなさりましたのでござりますか。」
「何、山田の停車場から、直ぐに、右内宮道とある方へ入つて來たんだ。」
「其では、當伊勢はお馴れ遊ばしたもので、此の此邊には御親類でもおありなさりますといふ。ーー」と、婆々は客の言尻について見たが、其の實、土地馴れぬことは一一目見ても分るのであつた。
「何うして、親類處か、定宿もない、矢張田舎ものゝ參宮さ。」
「おや！」
と大きく、
「それでも能く乘越しておいでなさりましたよ。此の邊まで入らつしやいます前には、あの、まあ、伊勢へおいで遊ばすお方に、山田が玄關なら、其をお通り遊ばして、何うぞ此方へと、お待受けの別嬪が、お袖を取るばかりにして、御案内申します、お客座敷と申しますやうな、お褥を敷いて、花を活けました、古市があるではござりませぬか。」

客は薄ら寒さうに、これでもと思ふ状、爛の出來立のを注いで、猪口を唇に齎らしたが、匂を嗅いだばかりで暫時其まゝ、持つ内に冷くなるのを、飲む眞似して、重さうに丁と置き、

「そりや何だらう、山田からずツと入ると、遠くに二階家を見たり、目の前に茅葺が顯れたり、然うかと思ふと、足許に田の水が光つたりする、其の田圃も何となく、大な庭の中に故と拵へた景色のやうな、なだらかな道を通り越すと、坂があつて、急に兩側が眞赤になる。彼處だらう、店頭の雪洞やら、軒提灯やら、其處は通つた。」

三

「はい、あの軒毎、家毎、向　三軒　兩隣と申しました工合に、玉　轉し、射的だの、あなた、賭的がござりまして、山のやうに積んだ景物の數ほど、灯が澤山點きまして、何時も花盛りのやうな、賑な處でござります。」

客は火鉢に手を翳し、

「何の店にも大きな人　形を飾ってあるぢやないか、赤い禰襠を着た姐様もあれば、向う顱卷をした道化もあるし、牛若もあれば、彌次郎兵衛もある。屋根へ手をかけさうな大蛸が居るかと思ふと、腰蓑で村雨が隣の店に立つて居るか、下駄屋にまで飾つたな。皆　極彩色だね。中に彼の三間々口一杯の布袋が小山のやうな腹を据ゑて、仕掛けだらう、福相な柔和な目も、人形が大きいから此の皿位あるのを、ぱくりと遣つちや、手に持つた團扇をばさり／＼、往来を煽いで招くが、道幅の狭い處へ、道中　雙六で見覺えの旅の人の姿が小さいから、吹飛ばされさうです、其に、墨の法衣の繪具が破れて、肌の斑兀の様子なんざ、餘程凄い。」

「招も善惡でござりまして、姫方や小兒衆は恐いとおつしやつて、旅籠屋で魘されるお方もござりますさうでござりまする。其ではお氣味が惡くつて、さつさと通り抜けてお了ひなされましたか。」

「詰らないことを。」

客は引緊つた口許に微笑した。

「しかし、土地にも因るだらうが、奥州の原か、飛騨の山で見た日には、氣絶をしないぢや濟むまいけれど、伊勢といふだけに、何しろ、電信柱に附着けた、ペンキ塗の廣告まで、土佐繪を見るやうな心持のする國だから、赤い唐縮緬を着た姐さんでも、京人形ぐらゐには美しく見える。此方へ來るといふので道中も餘所とは違つて、あの、長良川、揖斐川、木曾川の、どんよりと三條竝んだ上を、晩方通つたが、水が油のやうだから、汽車の音もしないまでに、鵲の橋を、辷つて銀河を渡つたと思つた、それからといふものは、夜に入つて此む伊勢路へかゝるのが、何か、雲の上の國へでも入るやうだつたもの、何うして、あの人形に、心持を惡くしてなるものか。」

「これは、旦那様お世辟の可い、土地を賞められ

まして何より嬉しうございます。で何でございまするか、一刻も早く御参詣を遊ばさう思召で、此邊まで乗切つて入らつしやいました？」

「然ういふわけでもないが、伊勢音頭を見物するつもりもなく、古市より相の山、第一名が好いではないか、あひの山。」

客は何思ひけむ手を頬にあてゝ、片手で弱々と胸を抱いたが、

「お婆さん、昔から聞馴染の、お杉お玉といふのは今でもあるのか。」

「それはござりますよ。つい此の前途をたら／＼と上りました、道で申せば先づ峠のやうな處に觀世物の小屋がけになつて、矢張紅白粉をつけましたのが、三三味線でお鳥目を受けるのでござります、其よりは旦那様、前方に行つて御覧じやりまし、川原に立つて居りますが、三十人、五十人、橋を通行のお方から、お錢の礫を投げて頂いて、手ン手に長樟の尖へ網を張りましたので、宙で受け留めまするが、秋口蜻蛉の飛びますやうでござります。橋の袂には、女房達が、ずらりと大地に並ひまして、一文二文に兩　換をいたします。さあ、此の橋が宇治橋と申し

まして、内宮様へ入口でござりまする。川は御存じの五十鈴川、山は神路山。其の姿の優しいこと、氣高いこと、尊いこと、清いこと、此の水に向うて立ちますと、人膚が背後から皮を透して透いて見えます位、急にも流れず、淀みもしませず、浪の立つ、瀬といふものもござりませぬから、色も、蒼くも見えず、白くも見えず、緑の淵にもなりませず、一様に、眞の水色といふのでござりましよ。

渡りますと、それから三千年の杉の森、神代から晝も薄暗い中を、ちら／＼と流れまする五十鈴川を眞中に、神路山が裏みまして、いつも靜に、神風が此處から吹きます、此處に白木造の尊いお宮がござりまする。」

四

「内宮で在らつしやいます。」

婆々は掌を擧げて白髪の額に頂き、

「何事のおはしますかは知らねども、忝さに涙こぼるゝ、自然に頭が下りまする。お歸りには二見ケ浦、これは申上げるまでもございませぬ、五十鈴川の末、向うの岸、此方の岸、枝の垂れた根上り松に纜ひまして、其處へ參る船もございます。船頭たちが何故素袍を着て、立烏帽子を被つて居ないと思ふやうな、尊い川もございまする、女の曳きます俥もございます、丁ど明日は舊の元日。初日の出、」

いひかけて急に膝を。

「おゝ、然ういへば旦那樣、お宿は何うなさります思召。

成程、おつしやりました名の通、あなた相の山まで入らつしやいましたが、此の前方へおいでなさりましても、住いお宿はございません。後方の古市でございませんと、旦那樣方がお泊りになりまする旅籠はございませんが、何にいたしました處で、もし、此處のことでございまする、必ず／＼お急き立て申

しますではないのでござりまするけれども、お早く遊ばしませぬと、お泊が難しうござりますので。はい、何時もまあ恁うやつて、大神宮様のお庇で、繁昌をいたしまするが、舊の大晦日と申しますと、諸國の講中、道者、行者の衆、京、大阪は申すに及ひませぬ、夜一夜、古市でお籠をいたしまして、元朝、宇治橋を渡りまして、貴客、五十鈴川で嗽手水、神路山を右に見て、杉の樹立の中を出て、御廟の前でほの／＼と白みますといふ、それから二見ケ浦へ初日の出を拝みに廻られまする、大層な人數。

旦那様お通りの時分には、玉ころがしの店、女郎屋の門などは軒竝戸が開いて居りましてございませうけれども、旅籠屋は大抵戸を閉めて居りましたことゝ存じまする。

何の家も一杯で、客が受け切れませんのでござります。」

婆々は犇々／＼、大手の木戸に責め寄せたが、

「しかし貴客、三人、五人こぼれますのは、旅籠でも承知のこと、相宿でも間に合ひませぬから、廊下のはづれの圍だの、數寄な四阿だの、主人の住居

などで受けるでございますよ。」
と搦手を明けて落ちよといふなり。
けれども何の張合もなかつた、客は別に騒ぎもせず、然ればつて聞棄てにもせず、何の機會もないのに、小形の銀の懐中時計をぱちりと開けて見て、無雑作に突込んで、
「お婆さん、勘定だ。」
「はい、あなた、もし御飯はいかゞでございます。」
客は仰向いて、新に婆々の顔を見て莞爾とした。
「いや、實は餘り欲しくない。」
「まあ、ソレ御覧じまし、其だのに、いかなこツても、酢蛸を食りたいなぞとおつしやつて、夜遊びをなすつて、飛だ若様でございます。何うして婆々が家の一膳飯がお口に合ひますものでございます。はゝほゝ。」
「時に、三由屋といふ旅籠はあるね。」
「えゝ、古市一番の舊家で、第一等の宿屋でございます。それでも、今夜あたりは大層なお客でございましよ。あれこれとおつしやつても、先づ古市で

は三由屋で、其上に講元のことでござりまするから、お客は上中下とも一杯でござります。」

「其は構はん。」といつて客は細く組違へて居た膝を割つて、二ツばかり靴の爪尖を踏んで居直つた。

「まあ、何といふことでござります、其では氣を揉むではなかつたに、先へ誰方ぞお美しいのが入らしつて、三由屋でお待受けなのでござりますね。故と迷兒になんぞお成り遊ばして、可うござります、翌日は暗い内から婆々が店頭に張番をして、藝妓さんとでも腕車で通つて御覽ぢやい。、お望の蛸の脚を放りつけて上げますに。」と煙管を下へ、手で掬つて、土間から戸外へ、……や……一寸投げた。トタンに相の山から戻腕車、店さきを通りかゝつて、軒にはた／＼と鳴る旗に、フト楫を持つたまゝ仰いで留る。

「車夫。」

「はい。」と媚しい聲、婦人が、看板をつけたのであつた、古市組合。

五

「はツ。」

古市に名代の旅店、三由屋の老番頭、次の室の敷居際にぴたりと手をつき、

「はツ申上げまするでございまする。」

上段の十疊、一點の汚もない、月夜のやうな青疊、紫縮緬ふツくりとある蒲團に、恰も其の雲に乘つたるが如く、菫の中から抜けたやうな、裝を凝した貴夫人一人。然も旅疲の状見えて、鼠地の縮緬に、麻の葉鹿の子の下着の瑞、媚かしきまで膝を斜に、三枚襲で着痩せのした、撫肩の右を落して、前なる桐火桶の縁に、引つけた火箸に手をかけ、片手を細りと懐にした姿。衣紋の正しく、顔の氣高きに似ず、見好げに過ぎて婀娜めくばかり。眉の鮮かさ、色の白さに、美しき血あり、清き肌ある女性とこそ見ゆれ、もし其の黒髪の柳濃く、生際の颯と霞んだばかりであつたら、畫ける幻と誤るであらう。袖口、八口、裳を溢れて、ちら／＼と燃ゆる友染の花の紅にも、絶えず、一叢の薄雲がかゝつて、淑ましげに、其の美を擁護するかの如くである。

岐阜縣××町、ー一里見稲子、二十七、と宿帳に控へたが、敢て誌すまでもない、岐阜の病院の里見といへば、家族雇人一同神の如くに崇拝する、嘗て當家の主人が、難病を治した名醫、且つ近頃三由屋が、株式で伊勢の津に設立した、銀行の株主であるから。

晩景、留守を預る此の老番頭にあてゝ、津に出張中の主人から、里見氏の令夫人參宮あり、丁寧に宿を參らすべき由、電信があつたので、いかに多數の客があつても、必ず、一室を明けて置く．内證の珍客のために控への席へ迎へ入れて、滞りなく既に夕餉を進めた。

然れば夫人が座の傍、肩掛、頭巾などを引掛けた、衣桁の際には、萌黄の椴子の夏衾、高く、柔かに敷設けて、総附の塗枕、枕頭には蒔繪ものゝ煙草盆、鼻紙臺も差置いた、上に香爐を飾つて、呼鈴まで行届き、次の間の片隅には棚を飾つて、略式ながら、薄茶の道具一通。火鉢には釜の聲、遙に神路山の松に通ひ、五十鈴川の流に應じて、初夜も早や過ぎたる折から、此處の行燈と彼處のランプと、唯も

う取交へるばかりの處。
「えゝ、奥方様、あなた様にお客にござりまして。」
優しい聲で、
「私に、」と品よく應じた。
「はツ、あなた様にお客來にござりまする。」
夫人はしとやかに、
「誰方だね、お名札は。」
「其の儀にござりまする。お名札をと申しますと、生僧所持せぬ、と恁やうにおつしやいまする、尤もな、あなた様お着が晩うござりましたで、彼是十二時。最う遅うござりますこ因つて、御一人旅の事ではありまするし、然やうなお方は手前どもにおいでがないと申して断りませうかとも存じましたなれども、たいせつなお客様、また何のやうな手落になりましても相成らぬ儀と、お伺ひに罷出ましてござりまする。」
番頭は一大事の如く、固くなつて、御意を得ると、夫人は何事もない風情、
「まあ、何とおつしやる方。」
「はツ立花様。」

「立花。」５６６
「えゝ、お少いお人柄な綺麗な方でおあんなさいまする。」
「然う。」と輕くいつて、莞爾して、一寸膝を動かして、少し火桶を前へ押して、
「ずん／＼入らつしやれば可いのに、あの、お前さん、何うぞお通し下さい。」
「へい、宜しうござりますか。」
頤の長い顔を茫乎と上げた、餘り夫人の無雑作なのに、些と氣抜けの體で、立揚る膝が、がツくり、ひよろりと手をつき、苦笑をして、再ひ、
「はツ。」

六

やがて入交つて女中が一人、今夜の忙しさに親類の娘が臨時手傳といふ、娘柄の好い、爪はづれの尋常なのが、

「御免遊ばしまし、あの、御支度は如何でございます。」

夫人此の時は、後毛のはら／＼とかゝつた、江戸紫の襟に映る、雪のやうな項を此方に、背向に火桶に凭掛つて居たが、輕く振向き、

「あゝ、最う出來てるよ。」

「へい。」と、其の意を得ない樣子で、三指のまゝ頭を上げた。事もなげに、

「床なんだらう。」

「否、お支度でございますが。」

「御飯かい。」

「はい。」

「そりやお前疾に濟んだよ。」と此方も案外な風情、餘の取込にもの忘れした、旅籠屋の混雜が、をかしさうに、莞爾する。

女中は又遊ばれると思つたか、同じく笑ひ、

「奥様、あの唯今のお客　様のでございます。」
「お客だい、誰も來やしないよ、お前。」と斜めに肩ごしに見遣たまゝ打棄つたやうにものゝすツきり。かへす言もなく、
「おや、／＼。」と口の中、女中は極の惡さうに顏を赤らめながら、變な顏をして座中を〓すと、誰も居ないで寂として、釜の湯がチン／＼、途切れてはチンといふ。
手持不沙汰に、後退にヒヨイと立つて、茫乎として襖がくれ、
「御免なさいまし。」と女中、立消えの體になる。
見送りもせず、夫人は一寸根の高い圓髷の鬢に手を障つて、金蒔繪の鼈甲の櫛を抜くと、指環の寶玉きらりと動いて、後毛を掻撫でた。

廊下をばた／＼、しと／＼と疊ざはり。襖に半身を隱して老番頭、呆れ顏の長いのを、擡げるが如く差出したが、急込んだ調子で、
「はツ。」
夫人は蒲團に居直り、薄い膝に兩手をちやんと、媚しいが威儀正しく、

「寝ますから、もうお構ひでない、お取込の處を御厄介ねえ。」
「はツはツ。」
遠くから長廊下を駈けて來た呼吸づかひ、番頭は口に手を當てゝ打咳き、
「えゝ、混雑いたしまして、何うも、其の實に行届きません、平に御勘辨下さいまして。」
「否。」
「もし、あなた様、希有でござります。確か唯た今、私が、此方へお客人をお取次申しましてござりましてござりまするな。」
「然う、立花さんといふ方が見えたつてお謂ひだつたよ。何うかしたの。」
「へい、其處で女どもを以ちまして、お支度の儀を伺はせました處、誰方もお見えなさりませんさうでござりまして。」
「あゝ、然う、誰も入らつしやりやしませんよ。」
「はてな、もし。」
「何なの、お支度ツて、それぢや、今着いた人なんですか、内に泊つてゞも居て、宿帳で、私の居ることを知つたといふやうな譯ではなくツて？」

「何、もう御覽の通、此方は中庭を一ツ、橋懸で隔てました、一室別段のお座敷でござりますから、然のみ騒々しうもございませんが、二百餘りの客でござりますで、宵の内は宛然戰爭、帳場の傍にも圍爐裡の際にも我勝で、なか／＼足腰も伸びません位、野陣見るやうでござりまする。迚も何うも此の上お客の出来る次第ではございませんので、早く大戸を閉めました。帳場は何うせ徹夜でござりますが、十二時といふ時、腕車が留まつて、門をお叩きなさいまする。」

七

「お氣の毒ながらと申して、お宿を斷らせました處、連が來て泊つて居る。兎も角も明けい、とおつしやりますについて、彼の、入口の、大抵原ほどはござります、板の間が、あなた樣、道者衆で充滿で、足踏も出來ません處から、框へかけさせ申して、帳場の火鉢を差上げましたやうな次第で、それから貴女樣がお泊りの筈、立花が來たと傳へ呉れい、といふ事でござりまして。

早速お通し申しませうかと存じましたなれども、此方樣はお一方、御婦人で在らつしやいます事ゆゑ念のために、私お伺ひに出ました儀で、直ぐにといふ御意にござりましたで、引返して、御案内。えゝ、唯今の女が、廊下をお連れ申したでござります。

女が、貴女樣此のお部屋へ、其の立花樣といふのがお入り遊ばしたのを見て、取つて返しましたで、折返して、お支度の程を伺はせに唯今差出しました處、何か、然やうな者は一向お見えがないと、恁うおつしやいます。又お座敷には、奥方樣の他に誰方もおいでがないと、目を丸くして申しますので、何

を寝惚けをるぞ、汝が薄眠い顔をして居るで、お遊ひなされたであろ、なぞと叱言を申しましたが、女いひまするには、なか／＼、洒落を遊ばす御様子ではないと、眞顔でござりますについて、えゝ、何より證據、土間を見ましてございます。」

いひかけて番頭、片手敷居越に乘出して、

「ト其時、お上りになつたばかりのお穿物が見えませぬ、洋服でおあんなさいましたで、靴にござりますな。

さあ、居合せましたもの總立になつて、床下まで覗きましたが、どれも礼をつけて預りました穿物ばかり、其らしいのもござりませぬで、希有ぢやと申出しますと、いや案内に立つた唯今の女は、見す／＼廊下をさきへ立つて參つたというて、蒼くなつて震へまするわ。

太う恐がりまして此方へよう伺へぬと申しますので、手前駈出して參じましたが、否、もし全く此方様へは誰方もおいでなさりませぬか。」と、穏ならぬ氣色である。

夫人、するりと膝をずらして、後へ身を引き、座蒲團の外へ手の指を反して支くと、膝を、辷つた桃

色の絹のはんけちが、褄の折端へはらりと溢れた。
「厭だよ、串戯ではないよ、穿物がないんだつて。」
「御意にござりまする。」

「をかしいねえ。」と眉をひそめた。夫人の顔は、コオトをかけた衣桁の中に眉暗く、洋燈の光の隈あるあたりへ、魔のかげがさしたやう、圓髷の高いのも艶々として、其處に人が居さうな氣勢である。
疊から、手をもぎ放すが如くにして、身を開いて番頭、固くなつて一呼吸つき、
「で、ござりまするなあ。」
「お前、然ういへば先刻、如彼いつて來たもんだから、今に其の人が見えるだらうと、火鉢の火なんぞ、突ついて居ると、何なの、しばらくすると、今の姐さんが、ばた／＼來たの。次の室の其處へちらりと姿を見せたつけ、私はお客が來たと思つて、言をかけようとする内に、直ぐ忙しさうに出て行つて、今度來た時には、突然、お支度はつて、お聞きだから、變だと思つて、誰も來やしないものを。」と然も訝しげに、番頭の顔を熟と見ていふ。

愈々、きよとつき、

「はてさて、いや何うも何でござりまして、えす、廊下を急足にすた／＼お通んなすつたと申して、成程、跫音がしなかつたなぞと、女は申しますが、其は早や、氣の所為でござりませう。何しろ早足で廊下をお通りなすつたには相違ごぎりませぬ、さきへ立つて參りました女が、せい／＼呼吸を切つて駈けまして、其で何うかすると、背後から、其のお客の身體が、ひつたり附着きさうになりまする。」

番頭は氣がさしたか、密と振返つて背後を見た、釜の湯は沸つて居るが、塵一つ見當らず、恁ういふ折には、餘りに廣く、且つ餘りに綺麗であつた。

「それがために二三度、足が留まりましたさうにござりまして。」

八

「中には其立花様とおつしやるのが、剽輕な方で、一番三由屋をお擔ぎなさるのではないかと、申すものもございまするが、此の寒いに、戸外からお入りなさつた切、洒落にかくれんほを遊ばす陽氣ではございません。殊に靴までお隠しなさりますなぞは、些と手重過ぎまするで、何うも變でございまするが、お年紀頃、御容子は、先刻申上げましたので、其の方に相違ございませぬか、お綺麗な、品の可い、面長な。」

「全く、然う。」

「では、其の方は、然やうな御串戯をなさる御人體でございますか、立花様とおつしやるのは。」

「否、大人い、澤山口もきかない人、而して病人なの。」

そりやこそと番頭。

「えゝ。」

「もう、大したことはないんだけれど、一時は大病でね、内の病院に入つて居たんです。東京で私が姉妹のやうにした、然るお嬢さんの従兄子

でね、彼の美術、何、彫刻師なの。國々を修行に歩行いて居る内、養老の瀧を見た歸りがけに煩つて、宅で養生をしたんです。二月ばかり前から、大層、よくなつたには、よくなつたんだけれど、未だ十分でないツていふのに、肯かないで又た旅へ出掛けたの。

私が今日此方へ泊つて、翌朝お參をするツてことは、かね／＼話をして居たから、大方旅行先から落合つて來たことゝ思つたのに、まあ、お前、何うしたといふのだらうね。」

「はツ。」

といふと肩をすぼめて首を垂れ、

「これは、もし、旅で御病氣かも知れませぬ。否、別に、貴女様も身體に仔細はござりませぬが、よく然うしたことがあるものにござります。はい、何、もうお見上げ申しましたばかりでも、奥方様、お身のまはりへは、寒い風だとて寄ることではござりませぬが、御歸宅の後はおこゝろにかけられて、さき／＼お尋ね遊ばしてお上げなされまし、これは其の立花様とおつしやる方が、親御、御兄弟より貴女様

を便りに遊ばして在らつしやるに相違ございませぬ。」

夫人はこれを聞くうちに、差俯向いて、兩万引合せた袖口の、襦袢の花に見惚れるが如く、打傾いて伏目で居た。しばらくして、然も身に染みたやうに、肩を震はすと、後毛が又はら／＼。

「寒くなつた、私、もう寢るわ。」

「御寢なります、へい、唯今女中を寄越しまして、お枕頭も又。」

「いゝえ、煙草は飲まない、お火なんか澤山。」

「でも、其の、」

「あの、しかしね、間違へて外の座敷へでも行つて入らつしやりはしないか、氣をつけておくれ。」

「其はもう、屹と、未だ、方々見させてさへございまする。」

「然うかい、此家は廣いから、また迷兒にでもなつてると惡い、可愛い坊ちやんなんだから。」とぴたりと帶に手を當てると、帶しめの金金具が、指の中で。ハチリと鳴る。

先刻から、ぞく／＼して、ちりけ元は水のやうな

老番頭、思ひの外、女客の恐れぬを見て、此の分なら、お次へ四天王にも及ぶまいと、

「えゝ、然やうならばお靜に。」

「あゝ、御苦勞でした。」と、いつてすツと立つ、汽車の中から其まゝの下じめがゆるんだか、絹足袋の先へ長襦袢、右の褄がぞろりと落ちた。

「お手水。」

「否、寝るの。」

「はツ。」と、いふと、腰を上げざまに襖を一枚、直ぐに縁側へ、辷つて出ると、呼吸を凝して二人ばかり居た、恐いもの見たさの徒、ばたり、ソツと退く氣勢。

「や。」といふ番頭の聲に連れて、足も裾も巴に入亂るゝかの如く、廊下を彼方へ、隔つて叉跫音、次第に跫音。此の汐に、其處中の人聲を浚へて退いて、果は遙な戸外二階の突外れの角あたりと覺しかつた、三味線の音がハタと留んだ。

聞澄して、里見夫人、裳を前へ捌かうとすると、うつかりした褄がかゝつて、引留められたやうによろめいたが、衣裄裄に手をかけ、四邊を■し、向うの押入をじつと見る、瞼に颯と薄紅梅。

九

煙草盆、枕、火鉢、座蒲團も五六枚。（これは物置だ。）と立花は心付いた。

はじめは押入と、しかし其にしては居周圍が廣く、破れては居るが、筵か、疊か敷いてもあり、心持四疊半、五疊、六疊ばかりもありさうな。手入をしない圍なぞの荒れたのを、其のまゝ押入に遣つて居るのであらう、身を忍ぶのは誂へたやうであるが。

（待て。）

案内をして、やがて三由屋の女中が、見えなくなるが疾いか、ものをいふよりは先づ唇の戰くまで、不義ではあるが思ふ同士。目を見交したばかりで、豫て算した通り、一先づ姿を隱したが、心の闇より暗かつた押入の中が、恁う物色の出來得るは、扨は目が馴れた所為であらう。

立花は、座敷を番頭の立去つたまで、半時ばかりを五六時間、待飽倦んで居るのであつた。

（先、可し。）

と襖に密と身を寄せたが、うかつに出らるゝ數でなし、言をかけらるゝ分でないから、其のまま呼吸

を殺して彳むと、稍あつて、はら／＼と衣の音信。
目前へ路がついたやうに、座敷をよぎる留南奇の薫、ほの床しく身に染むと、彼方も思ふ男の人香に寄る蝶、處を違へず二枚の襖を、左の外、立花が立つた前に近づき、
「立花さん。」
「・・・・・・・・・・・・」
「立花さん。」
襖の裏へ口をつけるばかりにして、
「可いんですか。」
「未だよ、まだ女中が來るツていふから少々／＼あなた、靴まで隠して來たんですか。」
表に夫人の打微笑む、目も眉も鮮麗に、人丈に暗の中に描かれて、黒髪の輪郭が、細く圓髯を劃つて明い。
立花も莞爾して、
「何うせ、騙す位ならと思つて、外套の下へ隠して來ました。」　「旨く行つたのね。」
「旨く行きましたね。」
「後で私を殺しても可いから、もう些と辛抱なさいよ。」

「お稲さん。」
「えゝ。」となつかしい低聲である。
「僕は大空腹。」
「何處かで食べて來た筈ぢやないの。」
「何うして貴方に逢ふまで、お飯が咽喉へ入るもんですか。」
「まあ……」
黙つてしばらくして、
「さあ。」
手を中へ差入れた、紙包を密と取つて、其の指が搦む、手と手を二人。
隔の襖は裏表、兩方の肩で壓されて、すら／／と三寸ばかり、暗き柳と、曇れる花、淋しく顔を見合せた、トタンに跫音、續いて跫音、夫人は衝と退いて小な咳。
さそくに後を犇と閉め、立花は掌に据ゑて、瞳を寄せると、輕く捻つた懐紙、二隅へはたりと解けて、三ツ美く包んだのは、菓子である。
唯見ると、白と紅也。
「はてな。」

立花は思はず、膝をついて、天井を仰いだが、板か、壁か明かならず、低いか、高いか、定でないが、何となく暗夜の天まで、布一重隔つるものがないやうに思はれたので、稍急心になつて引寄せて、袖を見ると、着たまゝで隠れて居る、外套の色が仄に鼠。

菓子の色、紙の白きさへ、ソレかと見ゆるに、仰げば節穴かと思ふ明もなく、其の上、座敷から、射し入るやうな、透間は些しもないのであるから、驚いて、ハタと夫人の賜物を落して、其の手でじつと眼を蔽うた

。

立花は目よりも先づ氣を判然と持たうと、兩手で顔を蔽ふ内、將に人道を破壊しようとする身であると心付いて、矢庭に手を放して、其の手で、胸を打つて、岸破と眼を開いた。

何故なら、今然うやつて跪いた體は、神に對し、佛に對して、ものを打念ずる時の姿勢であると思つたから。

あはれ、覺悟の前ながら、最早や神佛を禮拝し得べき立花ではないのである。

扨心がら鬼の如き目を瞋くと、餘り強く面を壓して居た、為であらう、襖一重の座敷で、二人ばかりの女中と言葉を交はす夫人の聲が、遠く聞えて、遙に且つ幽に、然も細く、耳の端について、震へるやう。

それも心細く、其の言ふ處を確めよう、先刻に老番頭と語るのを此の隠れ家で聞いたる如く、自分の居處を安堵せんと欲して、立花は手を伸べて、心覺えの隔ての襖に觸れて試た。

人の妻と、恁る術して忍ひ合ふには、疾く我がためには、神なく、佛なく、父なく、母なく、兄弟なく、名譽なく、生命のないことを悟つて居たけれども、唯世に里見夫人のあるを知つて、神佛より、父より、母より、兄弟より、名誉より、生命よりは便にしたのであるが。　　こはいかに掌は、徒に空を撫でた。

慌しく丁と目の前へ、一杯に十指を竝べて、左右に暗を掻探つたが、遮るものは何にもない。

扨は、暗の中に暗をかさねて目を塞いだため、惱に方角を失つたのであらうと、先づ慰めながら、居直つて、今まで前にしたと反對の側を、衝と今度は

腕を差出すやうにしたが、其も手ばかり。

はツと俯向き、兩方へ、前後に肩を分けたけれども、ざらりと外套の袖の揺れたるのみ。

赫と逆上せて、堪らずぬつくり突立つたが、南無三物音が、とぎよツとした。　あツといふ聲がして、女中が襖をと思ふに似ず、寂寞として、但夫人のものいふと響くのが、ぶる／＼と耳について、一筋づゝ髪の毛を傳うて動いて、人事不省ならんとする、瞬間に異ならず。

同時に眞直に立つた足許に、なめし皮の樺色の靴、宿を欺くため座敷を抜けて持つて入つたのが、向うむきに揃つて居たので、立花は頭から慄然とした。

靴が左から……ト一ツ留つて、右が其の後から……ト前へ越すと、左がちよい、右がちよい。

譬へは歩行の折から、爪尖を見た時と同じ状で、前途へ進行をはじめたので、〓呀と見る／＼、二間三間。

十間、十五間、一町、半、二町、三町、彼方に隔るのが、何うして目に映るのかと、怪む、とあらず、歩を移すのは渠自身、即　立花であつた。

茫然。

世に茫然といふ色があるなら、四邊の光景は正しく其。月もなく、日もなく、樹もなく、草もなく、路もない、雲に似て踏みごたへがあつて、雪に似て冷からず、朧夜かと思へば暗く、東雲かと見れば陰々たる中に、煙草盆、枕、火鉢、炬燵櫓の形など左右、二列びに、不揃ひに、澤庵の樽もあり、石臼もあり、俎板あり、灯のない行燈も三ツ四ツ、恰も人のない道具市。

然も其の火鉢といはず、臼といはず、枕といはず、行燈といはず、一齊に絶えず微に揺いで、國が洪水に滅ぶる時、呼吸のあるは悉く死して、恁る者のみ漂ふ風情、たゞソヨとの風もないのである。

十

其中に最も人間に近く、頼母しく、且つ奇異に感じられたのは、唐櫃の上に、一個八角時計の、仰向けに乗つて居た事であつた。立花は夢心地にも、何等か意味ありげに見て取つたので、つか／＼と靴を近けて差覗いたが、ものゝ影を見る如き、四邊は、針の長短と位地を分ち得るまでゞはないのに、判然と時間が分つた。然も九時半の處を指して、時計は死んで居るのであるが、鮮明に其の數字さへ算へられたのは、一點、螢火の薄く、而して瞬をせぬのがあつて、胸のあたりから、斜に影を宿したゝめで。

手を當てると冷かつた、光が隠れて、掌に包まれたのは襟飾の小さな寶石、時に別に手首を博ひ、雪のカウスに、ちら／＼と樹の間から射す月の影、露の溢れたかと輝いたのは、蓋し手釦の玉である。不思議と左を見詰めると、此の飾も又、光を放つて、腕を開くと胸が又晃きはじめた。

此の光、單に身に添ふばかりでなく、土に碎け、宙に飛んで、翠の蝶の舞ふばかり、目に遮るものは、臼も、桶も、皆これ青貝摺の器に齊い。

一足進むと、歩くに連れ、身の動くに従うて、颯と揺れ、溌と散つて、星一ツ一ツ鳴るかとばかり、白銀黄金、水晶、珊瑚珠、透間もなく鎧うたるが、月に照添ふに露違はず、然れば冥土の色ならず、眞珠の流を渡ると覺えて、立花は目が覺めたやうになつて、姿を、判然と自分を視めた。

我ながら死して榮ある身の、こは玉となつて碎けたか。待て、人の妻と逢曳を、と心付いて、首を低れると、再び眞暗になつた時、更に、しかし、身は未だ清らかであると、氣を取直して改めて、青く燃ゆる服の飾を嬉しさうに見た。而して立花は伊勢は横幅の渾沌として廣い國だと思つた。宵の内通つた山田から相の山、茶店で聞いた五十鈴川、宇治橋も、神路山も、ルビ　たて》―縦に長く、然も心に透通るやうに覺えて居たので。

其の時、もう、これをして、瞬間の以前、立花が徒に、黒白も分かず焦り悶えた時にあらしめば、忽ち驚いて倒れたであらう、一間ばかり前途の路に、袂を曳いて、厚い衽を踵にかさねた、二人、同一扮装の女の童。

竪矢の字の帯の色の、沈んで紅きさへ認められた

が、一度胸を蔽ひ、手を拱けば、立處に消えて見えなくなるであらうと、立花は心に信じたので、騒ぐ状なくじつと見据ゑた。

「はい。」

「お迎に參りました。」

駭然として、

「私を。」

「内方でおつしやいます。」

「お召ものゝ飾から、光の射すお方を見たら、お連れ申して參りますやうに、お使でございます。」と交る／＼いつて、向合つて、いたいけに袖をひたりと立つと、眞中に兩方から昇き据ゑたのは、其の面銀の如く、四方恰も漆の如き、一面の將棋盤。

白き牡丹の大輪なるに、二ツ胡蝶の狂ふやう、ちら／＼と捧げて行く。

今は譬ひ足許が水になつて、神路山の松ながら人肌を通す流に變じて、胸の中に舟を纜ふ、烏帽子直垂をつけた船頭なりとも、乘れとなら乘る氣になつた。立花は怯めず、臆せず、驚破といはゞ、手釦、襟飾を隱して、あらゆるものを見ないで置かうと、胸を据ゑて、靜に女童に從ふと、空はら／＼と星

になつたは、雲の切れたのではない、霧の晴れたのではない、渠が飾れる寶玉の、一叢の樹立の中へ、倒に同一光を敷くのであつた。　こゝに枝折戸。

戸は内へ、左右から、豫め待設けた二人の腰元の手に開かれた、垣は低く、女どもの高髷は、一對に、地づれの松の枝より高い。

十一

「何うぞこれへ。」

椅子を差置かれた池の汀の四阿は、瑠璃の柱、水晶の廂であらう、ひたと席に着く、四邊は晝よりも明かつた。

爾時打向うた卓子の上へ、女の童は、密と件の將棋盤を据ゑて、其まゝ、陽炎の縺るゝよりも、身輕に前後して樹の蔭にかくれたが、枝折戸を開いた侍女は、二人とも立花の背後に、しとやかに手を膝に垂れて差控へた。

立花は言葉をかけようと思つたけれども、我を敬ふこと恁の如きは、打ちつけにものをいふべき次第であるまい。

其處で、卓子に肱をつくと、青く鮮麗に燦然として、異彩を放つ手釦の寶石を便に、ともかくも駒を竝べて見た。

王將、金銀、桂、香、飛車、角、九ツの歩、數は恁る境にも異はなかつた。

やがて、自分のを竝べ果てゝ、對手の陣も敷き終る折から、異香ほの／＼として天上の梅一輪、遠

くこゝに薫るかと、遙に樹の間を洩れ来る氣勢。

圓形の池を大廻りに、翠の水面に小波立つて、二房三房、ゆら／＼と藤の浪、倒に汀に映ると見たのが、次第に近くと三人の婦人であつた。　やがて四阿の向うに來ると、二人颯と兩方に分れて、同一さまに深く、お太鼓の帶の腰を扱帶も廣く屈むる中を、靜に衝と抜けて、早や、しとやかに前なる椅子に衣摺のしつとりする音。

唯見ると、藤紫に白茶の帶して、白綾の衣紋を襲ねた、黒髪の艶かなるに、鼈甲の中指ばかり、づぶりと通した氣高き簾中。立花は品位に打たれて思はず頭が下つたのである。

ものゝ情深く優しき聲して、

「待遠かつたでせうね。」

一一言恰も百雷耳に轟く心地。

「おゝ、もう駒を竝べましたね、あひかはらず性急ね、さあ、貴下から。」

立花は恰も死せるが如し。

「私からはじめますか、立花さん……立花さん……」

正に此の聲、確に其の人、我が年紀十四の時から今に到るまで一日も忘れたことのない年紀上の女に初戀の、其の人やがて都の華族に嫁して以來、十數年間一度も其の顔を見なかつた、絶代の佳人である。立花は涙も出ず、聲も出ず、いふまでもないが、幾年月、寝ても覺ても、夢に、現に、くりかへし／＼いかに考へても、又た逢ふ時にいひ出づべき言を未だ知らずに居たから。

然りながら、然りながら、

「立花さん、これが貴下の望ぢやないの、天下晴れて私と此の四阿で、あの時分九時半から毎晩のやうに遊ひましたね。

其通りに恁うやつて將棊を一度さゝうといふのが。

然うぢやないんですか、あら、あれお聞きなさい。あの大勢の人聲は、皆、貴下の名譽を慕うて、此の四阿へ見に來るのです。御覧なさい、あなたがお仕事が上手になると、望もかなふし、然うやつてお身體も輝くのに、何が待遠くつて、道ならぬ心を出すんです。

恁うして私と將棋をさすより、餘所の奥さんと不

義をするのが望なの？」

衝と手を伸して、立花が握りしめた左の拳を解くが如くに手を添へつゝ、

「もしもの事がありますと、あの方もお可哀さうに、もう活きては居られません。あなたを慕つて下さるなら、私も御恩がある。然ういふあなたが御料簡なら、私が身を棄てゝあげませう。一所になつてあげませうから、他の方に心得違をしてはなりません。」と強くいふのが優しくなつて、果は涙になるはかり、念被觀音力觀音の柳の露より身に染々と、里見は取られた手が震へた。

後にも前にも左右にもすく／＼と人の影。

「あツ。」とばかり戰いて、取去らうとすると、自若として、

「今では誰が見ても可いんです、お心が直りましたら、さあ、將棊をはじめませう。」

靜に放すと、取られて居た手がげつそり痩せて、着た服が廣くなつて、胸もぶは／＼と皺が見えるに、屹と目を〓る肩に垂れて、渦いて、不思議や、己が身は白髪になつた、時に燦然として身の内の寶玉

は、四邊を照して、星の如く輝いたのである。

驚いて白髪を握ると、耳が暖く、襖が明いて、里見夫人、莞爾して覗込んで、

「もう可いんですよ。立花さん。」

操は二人とも守り得た。彫刻師は其の夜の中に、人知れず、暗ながら、心の光に縁側を忍んで、裏の垣根を越して、庭を出る其の後姿を、立花がやがて物語つた現の境の幻の道を行くが如くに感じて、夫人は肅然として見送りながら、遙に美術家の前程を祝した、誰も知らない。

たゞ夫人は一夜の内に、太く面やつれがしたけれども、翌日、伊勢を去る時、揉合ふ旅籠屋の客にも、陸續たる道中にも、汽車にも、恁ばかりの美女はなかつたのである。

【完】